

第 29 回(2009.12. 21 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「寅は虎」

もう間もなく平成 22 年(2010)になる。来年は寅年である。十二支の「寅」は、古代中国では「蟻(いん)」とって、「動く」という意味があり、植物の芽が生えてくる状態をさす言葉だった。これを動物の「虎」に当てはめたものである。『日本書紀』には、朝鮮半島の百濟(くだら)で虎を見た話が記録されているし、7 世紀天武天皇の頃、同じ朝鮮半島の新羅(しらぎ)から虎の毛皮が献上されたとあるが、日本では虎との出会いを記した記録がないから、日本には生息していなかったのではないかと思われる。豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に、「加藤清正の虎退治」の話があり、日本軍は虎に悩まされたようだ。そのころは朝鮮半島にもかなりの虎が生息していたものと思われるが、現在でも北朝鮮と中国の国境山岳地帯には若干生息しているという。

虎は、ライオンと同じでネコ科では最大の動物だが、ライオンと違うところは、集団での生活ではなく単独での行動が多いことや、ライオンのように草原ばかりではなく、森や渓谷にも生活の場を持っていることである。虎は 2、3 歳ごろから 2 年ないし 3 年に一度子供を生むが、虎の子供は 1 年半くらいは母親に依存して生きている。このように、大切に子供を育てる習性から、大切な金品などを「虎の子」と呼んだり、「虎穴に入らずんば虎児を得ず」などという諺が生まれたのだろう。ところで、「御虎子」を何と読むか知っている人は少ない。これは「おまる」と読む。そう、病人や幼児が使う簡易移動式トイレである。昔は木製の小判形した桶だったところから、小判は庶民にとって「虎の子」だったことから名付けられたという。また、諺に「虎の威を借る狐」というのがある。権力者をバックに、偉そうに振る舞う人のことだが、職場には必ず何人かはいるものだ。しかし、自分ではそう思っていない人が多い。案外、君もその一人かもしれないから気をつけよう。

虎は死して皮を残すが人間も

虎の皮は、非常にきれいな縞模様だから、昔から珍重されてきた。今でも多く棲息するインドでは、虎による被害が大きかったこともあって、虎狩りが行われてきた。特に、イギリスの支配下になってからは、スポーツとして狩りがおこなわれるようになったこともあって、今ではその数が激減した。

「虎は死して皮を残し、人は死して名を残す」という名言がある。意味はご存じのとおりだが、実は「人が死して皮を残した」ことがあった。第 2 次世界大戦時のナチス・ドイツによるアウシュビッツ収容所での話だが、アーリア人の純潔を守るという理屈から、多くのユダヤ人がポーランドに集められてガス室で虐殺されたことは、よく知られている。ちなみに、アーリア人とは通常インド・イラン系民族をいうが、ヒトラーはドイツ民族をアーリア人と呼んでいたようだ。この時、入れ墨をしていたユダヤ人の死体から皮膚を剥ぎ、鞣してブックカバーにした、という残虐な行為があった。雲竹齋も、以前にアウシュビッツ収容所跡の記念館に行ったことがあるが、夕暮れ時であったこともあり、うす暗い裸電球の下で見た毛髪の手鏡の山などの遺品からは鬼気迫るものがあった。肌寒く身震いをした思い出がある。人の肌で包んだ本とは、一体何が書かれた本なのだろうか。また、そんな本を持って歩く人たちはどんなの気持ちだったのだろうか。この雲竹齋ならピチピチした若い女性の温かい生きた肌に包まれたと思いますかね。

しかし、日本でも「虎」の名前を後世に残した人もたくさんいる。「とら」という名前思い出す人は、映画の「とらさん」だという人も多いが、あれは「寅さん」だ。「虎」といえば加藤清正(1562～1611)であろう。豊臣秀吉に幼少のころから仕え、「賤ヶ岳の七本槍」の一人としてその武勇を誇った。肥後熊本城主で、秀吉の朝鮮出兵でその勇猛果敢な攻撃で朝鮮軍から恐れられた。その際

に虎を退治したことから、後に「虎之助」と呼ばれた。豊臣秀頼が家康に二条城で会見した際に、秀頼に付添って暗殺を防いだといわれたが、熊本への帰途発病し、熊本城で亡くなった。家康による暗殺だったというわけもある。もし、清正が生きていたら、そう簡単には家康の天下にはならなかったであろうというのが大方の見方である。また、「川中島の戦い」で武田信玄としのぎを削った上杉謙信は、NHK 大河ドラマの「天地人」にも登場したが、幼名は「虎千代」である。女性では、「虎御前」がいる。日本三大仇討の一つである「曾我兄弟の仇討」で有名な兄の曾我祐成の恋人である。大磯の遊女だったが、祐成の死後19歳で出家し、その菩提を弔ったという。また、上杉謙信の生母も「虎御前」という説がある。どちらも絶世の美女だといわれているが、こういった話になると、決まって絶世の美女だという。不思議とブスだという話は聞かない。それは、世の男性どもが「女性とみれば決まって美人であってほしい」という願望のなせるわざで、だからといって自分のモノになるわけではないのに、悲しい性(さが)なのである。ちなみに、この雲竹斎の生家で飼っていたメス猫も「虎(子)」といった。残念ながらブスだった。

熊が書いた虎の巻

日本には「トラの巻」なる言葉があるが、本来は秘伝書あるいは秘法書のことから転じて、アンチョコを意味する言葉になったという。古代の中国に、太公望(たいこうぼう)という人がいた。この人は周王朝の建国の際に功のあった軍師だが、渭水(黄河の支流)のほとりで、針のない糸を垂れて大きな鯉を釣り上げたという故事で有名である。しかし、釣り上げたのは鯉ではなくて、周の文王(BC1152~BC1054)の軍師になったことを指すのだという。ここから、魚釣りの好きな人や「寝て果報を待つ」を気取っている人を太公望と呼ぶようになったが、周の太公が待ち望んでいたことから太公望といわれるようになったのだから、暇をもてあました凡人が、「われは太公望なりい？」などといって、魚釣りに現を抜かしていたり、ごろごろして遊んでばかりいるのは、勘違いもはなはだし

い。

この太公望は、中国における「軍師」の始まりだといわれているが、彼が著した軍学書に「太公六韜(たいこうりくとう)」という書がある。この六韜には文、武、龍、虎、豹、犬の6巻があって、「虎の巻」が最も難しい秘伝が書いてあったといわれているが、今日使われている「虎の巻」という言葉はここからきたものであろう。太公望の本名は、呂尚(りょしょう)で、字(あざな)は子牙(しが)、号を熊が飛ぶということから飛熊(ひゆう)といった。自分の号に熊をつけるくらいなのに、なぜ「熊の巻」を作らなかったのか、そんなことは知らない。

この「虎の巻」という言葉は、アンチョコともいわれるが、アンチョコとは安直という言葉が訛ったもので、安易な参考書とかメモ書きなどという意味で使われている。いつぞや、近所の女子高生が深刻な顔をしていたので、聞いてみると、試験が迫っているが歴史年表がなかなか覚えられないとのことだった。「アンチョコでも買ってきたら」といってやったら、餡をチョコレートで包んだものと勘違いしてか、「おじさん、そのチョコレートどこで売っていますか？」と聞かれた。こんな救いがたいバカはこの地球上から消える！と、思ったものだ。でも、家内によれば、学校の成績も優秀でなかなかいい子なのだと言った近所の評判だそうである。本当は、優しいおじさんの気を引くために、ちょっと冗談をいったのじゃあないですか、もしかするとチョコレートが欲しかったのでは、と笑いながらいう。ナメてはいけません。この優しそうなおじさんは、虎よりももっと恐ろしいオオカミになることが出来るのです。狼より虎の方が強い、などと真顔でいっている君は、もういいから、オシッコして寝なさい。どうしてもこの意味を知りたかったら、かつて一世を風靡したピンクレディの「SOS」の歌を聞けばいい。それでもわからなかったら、豆腐の角に頭でもぶっつけて死んでしまいなさい。